

# 《Pour Olivier, elle est un écrivain.》

— IL est un N 文が成立する要因について —

藤 田 康 子

## はじめに

人称代名詞 IL<sup>(1)</sup> と不定名詞句 un N が être によって結び付いた IL est un N 型繫辞文は、我々の知るかぎり、Jeunot (1983) を除けばこれまでほとんど研究されていない。Jeunot の研究では、SN est un N 文の容認度が、SN, N を修飾する形容詞・関係節の有無またはモダリティ、アスペクト上の要因によって異なることが指摘されている。その中で、N を修飾する語句のない、現在形・肯定・平叙文《il est un médecin》を含む発話は、いずれもまったく容認されないか、容認度が低いとされている<sup>(2)</sup>。

また、IL est un N 文は関連する研究の中で付随的に触れられることもあるが、その場合にも一般に容認度が低いと考えられてきた。たとえば、C'est un N と IL est  $\phi$  N の対比をめぐる Tamba-Mecz (1983)、東郷 (1988)、三藤 (1989)、坂原 (1990)、井元 (1991) のような論考の中でも、原則的に、成立しないあるいはしにくい文として扱われてきた。このうち Tamba-Mecz (*op. cit.*) は、成立しにくいのは属詞が主語の表す個体の *identité* を表す場合であり、その理由は、すでに同定されている人 (IL) を二重に同定することになるからだと述べている。しかし、問題なく成り立つ場合については、数例を挙げただけで分析は行っておらず、結局成立の要因は明らかにしていない。

東郷 (*op. cit.*) は、《Il est un linguiste.》のような文の「容認度が極めて低いのは、指示対象の *identité* が確立していることを前提とする IL を用いなが

ら、属詞 *un linguiste* であらためて *identité* を述べているためである」と説明しているが、「*identité* をあらためて強調する文脈では、…容認可能になる<sup>(3)</sup>」と補足している。

また坂原 (*op. cit.*) は、IL のような指示的名詞句は、主語名詞句の値を同定する指示的な属詞とは相容れないので「非文法的」になると考えている。ただし、IL が現実においては同定されていても、現実とは異なる特別な状況では同定されていないときは容易に許容されると注記している。

本稿では、これらの指摘を踏まえつつも異なる観点から、IL *est un N* タイプの文が自然な文として成立する場合があることを指摘し、その成立要因とは何かを明らかにしたい。

まず、どのような場合に IL *est un N* 文の容認度が高くなるのかを探り（1節）、続いて、必要な概念装置を導入した後、仮説を立て、検証を行う（2節）。

## 1. IL *est un N* 文の容認度が高くなる要因

IL *est un N* 文は文脈から切り離して提示されると、N によって多少の差があるとはいえ、容認度が極めて低い<sup>(4)</sup>。

(1) a. \* Il est un écrivain / un professeur / un voyageur.

b. ?? Il est un poète / un artiste.

付加形容詞が N を修飾する場合は容認度が幾分高くなる場合もある (a, b) が、一般に低い (c)。

(2) a. (?) Il est un vrai philosophe / un grand artiste.

b. ? Il est un écrivain remarquable / un grand voyageur.

c. \* Il est un enfant gai / un cinéphile passionné / un heureux étudiant.

ところが、主語が IL ではなく、JE・TU の場合は、形容詞がなくても容認

度はかなり高くなる。

- (3) Je suis (Tu es) un écrivain / un professeur / un voyageur /  
un poète / un artiste.

さらに主語が固有名詞でも、同様のことが観察される。

- (4) a. Sylvie est un écrivain.  
b. Chirac est un bourreau de travail.

主語が普通名詞の場合も（名詞の種類や限定辞によって容認度が変わり、一括して判断するのは難しく、詳細な検討が必要であるが）、IL とは違って問題なく成立する発話の例がある。

- (5) a. Ce chirurgien est un as.<sup>(5)</sup>  
b. Son frère de lait est un paysan.<sup>(6)</sup>

こうしてみると、一般に IL est un N 文の容認度が低い原因は、IL と un N の組み合わせそのものに求められそうにみえる。ところが、IL と un N がまったく相容れないかといえ、そうではない。(6) の場合のように、強勢を置いたり (a)、ある種の副詞 (b, c) や ne...que (d) を補ったりすると、容認度はかなり高くなる。

- (6) a. (?) Nathalie, elle est une artiste.  
b. (?) Elle est une mère avant tout.  
c. (?) Il est incontestablement un philosophe.  
d. Il n'est qu'un enfant.<sup>(7)</sup>

さらに、そのような要素がなくても、次のような文は問題なく成立する。

- (7) a. On dit qu'il est un écrivain.  
b. Isabelle pense qu'il est un écrivain.  
c. Pour Olivier, il est un écrivain.  
d. En France, il est un écrivain.

このような文は辞書の例文中にも見うけられ (e, f, g, h)、また実際の発話例としても報告されている (i)。

- (7) e. Il pensait qu'il était un as du barreau.<sup>(8)</sup>
- f. La commission d'enquête a reconnu qu'il était un cryptocom-  
muniste.<sup>(9)</sup>
- g. Tous furent d'accord pour reconnaître qu'il était un pigeon.<sup>(10)</sup>
- h. Tous ses amis lui ont dit qu'elle n'était qu'une sangsue.<sup>(11)</sup>
- i. Elle se dit qu'elle est une passagère, qu'il est un passager...<sup>(12)</sup>

以上の観察から、IL est un N 文の容認度を左右する要因を求めることができるだろうか。(7) に現れる《On dit que》, 《Isabelle pense que》, 《Pour Olivier》, 《En France》等の表現と結び付けられることによって容認度が格段に高くなるということは、何を意味するのだろうか。これらの表現は、統辞的にはほとんど共通点がない。では発話行為上はどのような機能を果たしているのだろうか。これらがどのような文脈で使われるかという点、たとえば、a は「彼は世間一般に認められた一角の作家だ」、b は「イザベルは彼のことを作家の名に値するほんとうの作家だと思っている」、c は「オリビエにとって、彼（もしくは自分）は（教師ではなく）作家なのだから、他の仕事などなくてよい」、d は「フランスでは彼は作家だが他の国では音楽家に通っている」といった類の文脈が想定できる。すなわち、それぞれすでに同定された要素 IL を作家というカテゴリーに属す一員として分類し直す作業を行っているといえる。IL が主語である場合、上述のような表現を伴う場合に容認度が増すのは、何らかの特定の状況で成立する分類として提示しているからだと思われる。一見あまり共通性がないように見える《On dit que》等の表現は、何らかの状況を設定する役割を果たしている点で一致しているといえよう。

## 2. メンタル・スペース理論と IL est un N 文

### 2. 1. スペース概念の導入

ここで、問題の鍵を握る概念を導入しておきたい。Fauconnier はその著書

*Espaces mentaux* の中で、メンタル・スペースという概念を提案した。メンタル・スペース（以下スペースと呼ぶ）とは、談話の中で話し手や聞き手が言語表現に基づいて構築する心的な空間のことで、言語表現は構築された空間内に対応する要素をもつと同時に要素間に成り立つ関係を記述する<sup>(13)</sup>。

ある発話が行われるときには、ある心的世界が必ず別の心的世界の中に包含されたものとして設定される。次の文をみてみよう。

(8) Luc croit que la fille aux yeux bleus a les yeux verts.

通常の解釈では、この文は話者の現実において碧い眼である娘が Luc の心的世界では緑の眼をしていることを表す。Luc の心的世界は子スペースと呼ばれ、話者の現実つまり親スペースに包含されたものとして設定される。すなわち、Luc の心的世界は話者の目を通して捉えられたものとして設定されるのである。

(8) でスペースを設定しているのは《Luc croit》という主節である。子スペースが親スペース内にどのように設定されるかは、このような《introduceur》と呼ばれるスペース導入表現により明示される場合と、先行する文脈から推測される場合とがある。スペース導入表現には、副詞グループ、副詞、〈si..., alors...〉のような命題結合子、〈Luc croit〉のような主語・動詞の結合したものがある。〈hier〉、〈il y a 10 ans〉等は時間スペースを導入し、〈en France〉、〈ici〉等は空間スペースを、〈dans ce domaine〉、〈dans cette pièce〉等は領域スペースを、〈sinon〉、〈si..., alors...〉等は仮定スペースを導入する。また、アスペクトとモダリティは明示的にスペースを設定するわけではないが、補助的な役割を果たす<sup>(14)</sup>。

(8) にはもう一つの解釈の可能性がある。この解釈では、通常の解釈の場合と同様に、話者の現実の中に Luc の心的世界が設定されるが、各スペースにおける要素の設定のされ方が異なる。すなわち、Luc の心の中には碧い眼をしていると同時に緑の眼をしている娘という、現実にはありえない矛盾した要素が設定される。話者の現実にはそのような矛盾した要素は存在しない<sup>(15)</sup>。

このように、同じ一つの文でも、どのようにスペースが設定されるか、つまり各々のスペースの中で要素がどのように位置づけられているかによって、解釈が異なる。

本稿は、メンタル・スペース理論のこのような概念を援用して仮説を立てていくが、ここでは発話が複数のスペースを設定することと、あるスペースの要素に対応する名詞句が他のスペースの要素にも対応することもあれば（第一の解釈）しないこともある（第二の解釈）ということに留意しておく。

## 2. 2. IL est un N 文におけるスペースの設定

さて、IL est un N 文の問題に戻ろう。(7) で見たように、IL est un N 文は、《On dit que》, 《Isabelle pense que》, 《Pour Olivier》, 《En France》等の表現、すなわちスペース導入表現を伴うと、容認度は非常に高くなる。そして、この構文は、すでに同定された個体をもう一度改めて分類し直すことを表すと考えられる。

この直感的な判断に理論的枠組みを与えるために、メンタル・スペース理論の概念装置を適用しよう。まず (7) b) について考えてみる。

### (7) b. Isabelle pense qu'il est un écrivain.

今、先行文脈がないので、仮に親スペースMを話者の現実Rとすると、子スペース M' は、話者の目を通して見た Isabelle の心的世界である。M' はスペース導入表現《Isabelle pense》によって設定される。IL はこの場合、Rにおける要素aに対応する。不定名詞句 un écrivain は、M' における要素wに対応し、w が M' においてもつ属性に基づいて、作家というクラスに分類され、その一員として捉えられていることを示している。être は異なるスペースに存在する要素 a, w を結びつける役割を果たしている<sup>(16)</sup>。IL は M' における要素wに対応しているのではないという点に注目しておきたい。というのは、もしwに対応するのであれば、《il est un écrivain》が表すのは  $w = w$  というトートロジーになってしまうからである<sup>(17)</sup>。



以上より、次の仮説を立てることができる。

(仮説) IL est un N 文において、IL は親スペースMにおける要素aに対応する。un N は子スペース M' の要素 w に対応し、w がNの表すクラスに属す一員であることを示す。動詞 être は a と w が対応関係にあることを示す。すなわち、IL est un N 文は、親スペースの要素 a と対応関係にある子スペースの要素 w が、N の表すクラスに分類されることを表す文である。

## 2. 3. スペースの設定と解釈

### 2. 3. 1. スペース導入表現と解釈

この仮説によると、un N によって表される分類は、子スペース M' における要素wについての分類であり、親スペースの要素aの分類ではなく、そのことが IL est un N 文成立の要因となっている。では、子スペースでの分類は、親スペースではどのように評価されているのだろうか。親スペースにおける要素aにはNの示す属性は認められず、この分類は否定されているのだろうか。

結論から先にいうと、評価はスペース導入表現に左右されるようである。まず、スペース導入表現に penser が使われている (7) b について考えてみよう。(7) b では、親スペースにおいては彼は作家のクラスに分類されているともされないとも示されていない。その証拠に (7) b は親スペースを話者の現実とする次の2種類の文脈におくことができる。(7) b' は親スペースにおいてもNの表す属性が認められる場合であり、(7) b'' は認められない場合である。

(7) b'. Isabelle pense qu'il est un écrivain. En effet, ses phrases ne sont pas celles d'un journaliste.

b''. Pour moi, ce n'est qu'un barbouilleur de papier, mais Isabelle pense qu'il est un écrivain.

では、スペース導入表現に croire を使うとどうなるだろう。この場合は、親スペースでは子スペースでの分類が否認されることが含意されるので (9) は

不適切な文となる。

- (9) \* Isabelle croit qu'il est un écrivain. En effet, ses phrases ne sont pas celles d'un journaliste.

このように、スペース導入表現は、子スペースを導入するが、同時に子スペースでの分類についての話者の評価を表すことがある。

### 2. 3. 2. 子スペースが JE・TU の心的世界の場合

いうまでもなく、仮説でみたような、ある要素の分類が子スペースで行われるという構造は、子スペースが第三者の心的世界である場合に限られたことではない。(10)は発話時点における JE や TU の心的世界の中で分類が行われている場合である。(10) c, d は JE や TU の心的世界で JE や TU 自身の分類が行われている点で興味深い。

- (10) a. Je pense qu'il est un écrivain.  
 b. Penses-tu qu'il est un écrivain?  
 c. Je pense que je suis un écrivain.  
 d. Penses-tu que tu es un écrivain?

たとえば (10) c のような発話が行われるとき、子スペースは JE の心的世界であるが、親スペースも JE の心的世界、つまり話者の現実であると設定できる。このように、JE を作家のクラスに分類するような世界を話者自身が自分の心的世界に特別に設けることにより、JE の心的世界での分類であることを聞き手にはっきりと示し、JE の主張・主観を強調する効果を生じさせることができる。従ってこのような文は、たとえば JE を作家のクラスに分類していない世界と対比させる文脈で使うことができよう。「あなたは／第三者はどう思っているか知らないが、私は自分を作家だと思っている」といった文脈である。また、《Il y a 10 ans, je n'étais qu'un journaliste. Mais je pense qu'aujourd'hui, je suis un écrivain.》という文脈であれば、親スペース（話者の現実）で現在の自分の心的世界と10年前の世界を対比させているといえよう。

### 2. 3. 3. スペース導入表現が明示されない場合



次に、スペース導入表現が統辞的に明示されない場合について分析する。(6) で見たように、IL est un N 文は必ずしもスペース導入表現を必要とするわけではない。強勢やある種の副詞や *ne...que* の存在により、容認度は高くなる。これは何を意味するのだろうか。(6)a について考えてみよう。(6)a が自然に発話されるような文脈にはどのようなものがあるだろうか。

(6) a'.      *Sa mère est une femme ordinaire. Mais Nathalie, elle est une artiste.*

ここでは話し手の現実において、Nathalie が芸術家のクラスの一員であることが、彼女の母親と比べると明らかなこととして、確信をこめて強調されている。本来なら、話者の心的世界での分類であることを *je pense* や *je crois, pour moi* などで明示するところであろう。が、このようなスペース導入表現を使用しないことにより、分類を話者の主観だけにやらず、広く認められたものとして提示することができる。

強勢や *avant tout, incontestablement, ne...que* といった表現は、分類を強調し、確信をもって示す働きをすると考えられる。

## 2. 3. 4. IL est un N 文が非文になる場合

これまで見てきたように、IL est un N 文は複数スペースにまたがる関係を表すときは問題なく成立する。では、子スペース内部の関係を表すことはないのだろうか。もう一度 Fauconnier を援用して考えてみよう。

Fauconnier は、名詞句が場所・時間・状況・文脈などによって異なる要素に対応することに注目して、名詞句を一種の関数とみなした。たとえば、《le président》という名詞句は、国・時期・組織等が決まらなければ、どの個体に対応するかが決まらない。つまり、場所や時間などをパラメータとする関数であり、Fauconnier はこれを「役割」と呼んでいる。パラメータが決まると、名詞句は個体に対応する。これは名詞句のとり「値」と呼ばれる。《le président》という名詞句は、フランスの1992年の大統領に関する文脈で使われるならば、Mitterrand がその値となる<sup>(18)</sup>。

名詞句のこのような解釈について、Fauconnier をもう少し引用しよう。

(11) Marie est la reine d'Angleterre.

通常の解釈<sup>(19)</sup> では、《Marie》は値解釈され、個体に対応し、《la reine d'Angleterre》は役割解釈され、個体に対応しない。ここで表されているのは、あるスペースの内部で Marie の属性がイギリスの女王であることと、役割「イギリスの女王」が Marie という値をとることである。このように、単純節は一般にスペース内部で役割と値を結びつける。

実はこのような子スペース内の役割・値関係は(11)が Isabelle croit のようなスペース導入表現に導かれる構文でも表すことができる。従って、(12)は役割・値解釈もできるし、複数スペースにまたがる解釈もできる。

(12) Isabelle croit que Marie est la reine d'Angleterre.

役割・値解釈をとるときは、Isabelle の心的世界で、Marie という値がイギリスの女王という役割に結び付いていることが表される。Marie は親スペース（たとえば話者の現実）においてエリザベスに対応しない。一方、複数スペース解釈のときは、Marie は親スペースの要素に対応し、la reine d'Angleterre は子スペースの要素に対応し、二つの要素が être によって結び付けられる。（このとき、親スペースが1992年における話者の現実ならば、la reine d'Angleterre は親スペースでエリザベスに対応する。）<sup>(20)</sup>

このような子スペース内部での役割・値解釈は IL est un N 文にも適用可能なのだろうか。(7)b の il に値解釈を試みてみよう。

(7) b. Isabelle pense qu'il est un écrivain.

il は親スペースの要素 a（個体）に対応し、a は子スペースに対応する要素 a' をもつ。a' は属性「作家」を備えている。il が子スペースで個体に対応しているので、属詞は属性 <écrivain> のみを記述すればよく、個体を表す un は必要ない。従って、従属節は il est écrivain となるはずである。以上より、(7) b は役割・値解釈できないと考えられる<sup>(21)</sup>。

## 結 論

多くの論考において容認度が低い文として片付けられがちであった IL est un N 文は、実は自然な文として成り立つ場合があり、その成立要因はメンタル・スペース理論を援用することにより明らかになった。すなわち、IL が親スペースの要素 a に対応し、a に対応する子スペースの要素 w が N の表すクラスに分類されることを表すとき、IL est un N 文は成立する。

このように、IL est un N タイプの文は複数スペースにまたがる関係を記述する。従って、文脈を欠くなど複数スペースの想定がしにくいような場合は、容認度が低くなる。インフォーマント調査では、使われる名詞によっても容認度に若干差がみられたが、多様な状況で分類基準として用いやすい名詞は容認度が高くなりやすいものと考えられる<sup>(22)</sup>。

また、どのようなスペース導入表現を使うかによっても、容認度に微妙な差がみられた。各表現がどのようにスペースを設定し、なぜ容認度に差が出るのかは改めて論じることしたい。

## 注

- (1) 本稿では IL という大文字表記により三人称の人称代名詞 il, elle, ils, elles を代表させる。
- (2) ただし、主語が LUI になると容認度が上がる。
- (3) 東郷はこの指摘を「Jeunot (1983) による」と注記している。
- (4) 容認度は複数のフランス人インフォーマントを使った調査に基づいて判定した。また、主語が複数の場合はさらに容認度が高くなるとするインフォーマントと、単数の場合同様、きわめて低いと感じるインフォーマントがいた。
- (5) 渡辺香根夫他編訳、『現代フランス語表現辞典』，大修館書店，1981，p. 217.
- (6) *Ibid.*, p. 73.
- (7) 『小学館ロベール仏和大辞典』，小学館，1988，p. 1999.

- (8) 渡辺香根夫他編訳, *op. cit.*, p. 286.
- (9) *Ibid.*, p. 312.
- (10) *Ibid.*, p. 114.
- (11) *Ibid.*, p. 294.
- (12) J. Lanzmann, *Les Transsibériennes*, p. 57 (Tamba-Mecz, p. 4 から引用).
- (13) Fauconnier 自身繰り返し強調しているように (1984, pp. 12-13, 24-26等), 彼の理論において言語形式はあくまで心的空間内に存在する要素に対応しているのであって, 心的要素がどのような現実の対象を「指示」するかを扱っているのではない。
- (14) *Ibid.*, pp. 32-33.
- (15) この二番目の解釈については, 神尾 (1990) 参照。
- (16) Fauconnier は動詞 être が《opérateur trans-spatial》であるとし, 異なるスペースに属する対応物を結びつける働きをする場合があることを指摘している (Fauconnier, *op. cit.*, pp. 183-189)。本稿では, être の機能を明らかにすることが目的ではないので, 細かい分析はしない。
- (17) これに類似するトートロジーについては *ibid.*, p. 185参照。
- (18) *Ibid.*, pp. 60-73.
- (19) いつも Marie という名の人がイギリスの女王だという解釈は除く。
- (20) *Ibid.*, pp. 186-187. 二種類の解釈は日本語版訳注に詳しく解説されている。
- (21) Fauconnier は, スペース導入表現を伴う SN<sub>1</sub> être SN<sub>2</sub> 文には, 複数スペース解釈と, スペース内部の役割・値解釈の二通りの可能性があるが, SN<sub>2</sub> が不定表現の場合は, 両者の差がなくなると述べている (*ibid.*, pp. 188-189)。ただし, (12), (13) については, (12) は複数スペース解釈を受け, (13) は《tu》が親スペース, 子スペースで各々要素 a, a' に対応し, 属詞は属性を記述する構造になっていることを明記している。

(12) Si tu étais un logicien,...

(13) Si tu étais logicien,...

また坂原 (1990) は, 複数のスペースが関係する場合に IL est un N 文が容易に「許容可能となる」ことを指摘しながら, (14) について我々とは異なる解説を試みている。

(14) Dans ce film, il est un étudiant.

坂原によれば, 映画という設定では「il はおおそ『彼の演じる人物』を指し, 役割として働くことができる」(p. 11)。しかし, il を役割解釈できるのは特殊な状況に限られ, (7) b のように il が個体に対応している場合には坂原の説明は成り立た

なくなる。

②2) たとえば révolutionnaire や génie の容認度が比較的高かった。

### 主要参考文献

- Fauconnier, G. (1984) : *Espaces mentaux*, Paris, Editions de Minuit (G. フォコニエ 著『メンタル・スペース』, 坂原 茂他訳, 白水社, 1987).
- 井元秀剛 (1991) : 「人称代名詞 IL の指示対象—主に CE との対比において」, 『仏語仏文学研究』第7号, pp. 117-141.
- Jeunot, D. (1983) : “*Il est médecin (pourquoi pas ?)*”, in Fisher, S. & J.-J. Franckel (eds), *Linguistique, énonciation. Aspect et détermination*, EHESS, pp. 81-96.
- 神尾照雄 (1990) : 『情報のなわ張り理論—言語の機能的分析』, 大修館書店.
- 三藤 博 (1989) : 「フランス語における *c'est* / *il est*, *ce N* / *le N* の対比について (情報の帰属領域の理論に向けて)」, 『フランス語学研究』第23号, pp. 60-67.
- 坂原 茂 (1990) : 「同定文・記述文とフランス語のコピュラ文」, 『フランス語学研究』第24号, pp. 1-13.
- Tamba-Mecz, I. (1983) : “Pourquoi dit-on : *Ton neveu, il est orgueilleux* et *Ton neveu, c'est un orgueilleux* ?”, in *Information Grammaticale*, XIX, pp. 3-10.
- 東郷雄二 (1988) : 「Mon frère, il est linguiste et le coupable, c'est lui. 代名詞 IL と CE の用法について」, 『フランス語フランス文学研究』第53号, pp. 102-111.

(文学部非常勤講師)